

## 書評 藤田徹著『エスノメソドロジカル・ソーシャルワーク』(2015 星雲社) — エスノメソドロジの視点とソーシャルワーク —

中 村 文 哉

「エスノメソドロジカル・ソーシャルワーク」という本書の題名表記は、後述する理由により、理論的な形容矛盾を含む「筆者による造語」(6頁。以下パーレン内の数字は書評対象書の頁数を示す。)である。しかし敢えて意図的にこの題名が付された本書は、エスノメソドロジの視点からソーシャルワークのもつ本質を経験的かつ理論的に示し、エスノメソドロジを軸とする社会学的思考を社会福祉学および社会福祉実践へと架橋していくまなざしのもとに展開される、極めてラディカルな発想の転換を試みる。

### I. 「エスノメソドロジカル・ソーシャルワーク」の主題化とその狙い

「エスノメソドロジカル・ソーシャルワーク」という表記は、なぜ理論的に形容矛盾を来たすのか。それは、著者が的確に指摘する通り、エスノメソドロジは「理論化、モデル化を目的としないアプローチ」(170)であるのに対して、ソーシャルワークとは「何らかの方法や技術を含む概念」(170)である以上、「エスノメソドロジカル・ソーシャルワーク」という連字符表現は「論理矛盾」(170)を来たすからである。だが、「常にコンテキストな要素が含まれている」(146)福祉現場での、一辺倒でマニュアル通りにはいかなない、それ故に「万華鏡」(45)の如き無限の可能性を持つブリコラージュ的な「専門実践」(72, 94)が求められるソーシャルワークには、実はエスノメソドロジストとしての資質、筆者の表現では「エスノメソドロジカルな能力」(170, 173)が必要になる。このことを、本書では、ソーシャルワークのあり様だけでなく、それに先立つソーシャルワーカー養成に向けた社会福祉学の教育カリキュラムにおいて、より特定すれば社会福祉実習前指導、実習場面、実習後指導から成る一連の社会福祉現場実習教育の局面において、経験的かつ理論的に示す。

本書のこのような狙いが主題化されたその出立点はある児童福祉施設での筆者自身の職場経験である。それは、「まなざしの地獄」(見田宗介)と化した児童

福祉施設に預けられた「5歳の淳」(12)が自分の力で「押し返すことのできない圧倒的な現実」(12)の前に、その苦境を「オレやだあ」(12)と漏らしたことに端を発する。筆者をして、反省的に「当時の心情を踏まえ直し応える」(12)とすれば、「淳、オレもやだあ」(12)と共鳴せざるを得ない事態が生じたのはなぜか。それは、どのように説明され、そして如何に相対化され、更に解決されるのか。これが本書における問題関心の端緒である。おそらくは、福祉サービスの対象者のみならず、そこで働く職員も「呆然」(12)とする以外にないこうした事態を相対化できる力があれば、この問題含みの事態を突破して、クリティカルにしてニーズの本質を弁えた福祉実践を開いていく視線も陶冶されてこよう。それだけに、ソーシャルワーカーにおけるエスノメソドロジストとしての資質、いやそれだけでなく、後に詳述するが、評者の関心も加味して表現すれば、ソシオロジストにしてソーシャルリサーチャー(社会調査者)としての資質の重要性が浮上してくる。

筆者がエスノメソドロジに関心を寄せるのは、こうした事態に象徴されるソーシャルワークの貧困な現実に対する問題意識からである。当然、こうした事態に対して予防線を張る必要は、どの福祉現場にもあるはずである。しかし、ここで問題なのは、管理のためのガイドラインとして、この予防線をマニュアル化させることではない。なぜなら、こうした事態は、ソーシャルワーカーとクライアントとの間で、常についてまわる可能性を孕むものだからである。それ故、ここで重要なのは、そうした予防線を、その都度の状況に応じて張ることのできる、それ故に貧困な福祉実践に陥る危険性を嗅ぎ分け、それを自己執行的に防ぎ、より良い福祉実践を志向するソーシャルワーカーの陶冶が必要になる。では、それを実現するためには何が必要か。

## II. 『教科書＝理論・方法等』を逆さまにする

筆者によると、上述の如きソーシャルワーカーの陶冶に必要なのは、あるべきソーシャルワークやソーシャルワーカーの理想像を教授することの意義を承認しつつも、そのみに全てを還元させるのではない仕方で、社会福祉現場実習を一つの重要な到達点とみなす社会福祉学の教育カリキュラムとその教育実践の問い直しである。あるべき理想像を脇においてしまうという、一見すると常識はずれにもみえるこの様な問い直しが必要になる社会福祉学教育の問題状況とは、「社会福祉の積年の課題である『理論と実践のかい離』」(45)を引き起こす根でもある。本書において、論脈を変えて繰り返し問われる〈ソーシャルワークは「専門職」か〉(32)という問い、あるいは「専門家」と「クライアントとの溝」(37)という象徴的な表現で示されるソーシャルワークの専門性に関わる一連の問題系は、この乖離のもう一つの表現といえよう。

本書は、件の乖離問題の所在を、端的に、「『理論』偏重」(72)による「専門理論」に対する「過大評価」(72)として定式化させる。ここでいう「専門理論」とは、「対人援助職の養成教育あるいは現任教育で習得する知識・方法・技術・実習指導等ロールプレイ……のシミュレーション学習」(93)の総体を指す。この定式化の背景にあるのは、社会福祉学を専攻すれば必然的に学修することになる社会福祉学の「専門理論」と社会福祉実習との「ギャップ」(79)の問題（そしてこのギャップが先述の理論と実践の乖離を用意し、その結果、専門家とクライアントの溝が形成されることになる）である。このギャップを踏まえ、筆者は、社会福祉学の「専門理論」を照合することのみで、個々のソーシャルワーク場面に現れる多様な福祉課題の「解決へ導く回答」(72)を得ることができるのか、という問いを立てる。それに対する筆者の回答は、「専門理論」(73)を、即ち「『教科書＝理論・方法等』を逆さまにする」(44)こと、更に換言すれば「『教科書＝理論・方法等』のツール化」(45)というアイデアである。これは、従来考えられていた社会福祉学の教育内容（「教科書＝理論・方法等」）を直接そのまま一つの専門的知識として実習に活かすという発想とは逆に、実習を含む福祉実践に内在する「実践知」(73)を引き出すことを着地点に、実践知を引き出すための単なるツール（手段としての認識論的な解釈枠組）として、「教科書＝理論・方法等」の「専門理論」を利

用するという発想である。通常、社会福祉学部での専門科目に登場する理論や概念、知識は、それらの修得が定期試験で試される大学教育の「主役」である。だが、「実践の即興性や機会の状況性」(146)を特徴とする現場実習では、それらを「脇役」に降格させ、実習での福祉実践の手段としてツール化させる、というのである。

このような発想の転換が迫られるのは何故か。それは、「自らの実践を対象化する方法論を習得せず現場に足を踏み入れている」(88)ソーシャルワーカーが多くを占めることから帰結する一連の福祉実践のあり様に関わる問題が、実は単なる知識を享受する「学校学習」と「実習学習」との「ギャップ」(79)を等閑視した現行の福祉学教育の体制に端を発するからである。この点は、筆者が明確に指摘する様に、社会福祉士「養成教育で習得した純粋知識が、現実の多様性に満ちた実践へそのまま活用できるわけではない」(73)ということの簡潔明快な証左といえよう。

社会福祉実践のあり様とともに、根底から問い直されなければならない社会福祉学教育の倒錯した事態は、社会福祉の危機に直結する。これは、福祉学教育と福祉実践の負の相互反映性とでもいうべき事態ではあるが、それだけに当時、5歳の淳と若きソーシャルワーカー・徹との邂逅と共振がもつ意味は深く重く、そしてそこから拓かれる射程は広い。

本書で示されるこうしたアイデアは、「教科書＝理論・方法等」を前提にソーシャルワークを照射する社会福祉観から、「多様な要素を含む複雑な生成過程」(44)を前提にソーシャルワークを照射する社会福祉観へのパラダイム転換であることを意味するといえよう。そして、このパラダイム転換の足場となるのが、「自らの実践を対象化する方法論」(88)を習得したソーシャルワーカー、換言すれば「専門理論をひとつの“ツール”とした専門実践を、対人援助のメソッドとして捉える視点」(73)のもとでのソーシャルワーカーの養成であり、そのための橋頭堡となるのが、本書が提唱するソーシャルワークにおけるエスノメソドロロジーの「活用」(170)である。

## III. エスノメソドロロジーとソーシャルワーク

筆者によると、エスノメソドロロジーとは「〈いまここ〉における現実が、成員による相互行為、つまり『人々の方法・手続き』によって構築される仕組みを

率直に記述するアプローチ」(63)である。つまりエスノメソドロジーは、〈いま-ここ〉において成員たち(人々)によって達成されていく現実について、その現実の外部にある専門知や理論を持ち込んだり観察者の視点に立つ等、「〈外側〉の視点からの解釈や説明を排し」(53)、その成員たちの視点に依拠して「当該の出来事へ関わる人々および関連するアーティファクト等を含む相互作用」(83)の記述をめざす。あくまでも現実の状況に立ち止まり、その状況を成り立たしめている人々の手続き的な達成のあり様を、省察的かつ内在的に、引き出そうとするのがエスノメソドロジーの狙いである。だが、なぜ、このようなアプローチが必要になるのか。それは、次の様に考えることができる。私たちは、こうした局面を自明視する余り、現実や状況の中でその都度、達成されていく成員たちの「現実構築の手段」(63)である「言葉や視線・表情や動作など」(63)、更には視線、沈黙、会話の順番とりといった営みや、そのようにして達成される日常生活の場面に対して、無反省な態度(自然的態度・常識態度)を寄せる。なぜなら、こうした達成の営みは、疑念の余地のない余りにも当たり前なことであり、かつ自明なことであり、かつ常識的なことであるために、成員たちにとって、それらは自然なものとして意識の中を滑ってしまう結果、翻ってそれらの過程を反省しようとする問題関心は、そもそも最初から剥奪されてしまっているからである。こうした事態に対して、エスノメソドロジーは、成員たちにより、体験され、半ば無自覚のうちに「見られているが気づかれていない(seen-but-unnoticed)」(171)一連の〈現実達成の手段・方法〉ないし〈人々の方法・手続き〉を明るみにもたらず。「〈いま-ここ〉でのソーシャルワーク実践が、クライアントとソーシャルワーカーのどのような知識(ツール)をもって、また、それをどのように活用して、その実践が達成されているのかを、ソーシャルワーカー自身が“解釈”として省みるのではなく、“事実”として発見する」(39)ことができる「エスノメソドロジー的な能力を修得した社会福祉専門職の姿」(170)が、ここから浮上する<sup>1</sup>。

#### IV. ソーシャルワークの「説明可能性」「文脈表示性」「相互反映性」

本書では、このような「人々の方法・手続き」を示す指標として、常に既に〈いま-ここ〉の現実におい

て、その都度、達成され、そこに、常に既に、現れている「説明可能性」「文脈表示性」「相互反映性」(47, 53)というエスノメソドロジーの三つの鍵概念を、端的に、措定する。例えば、自らの福祉実践は、自分だけでなく、クライアントにも、第三者にも「説明でき、報告でき、記述」(47)可能な仕方で常に既に達成されており、そのようにして「可視化」(47)されているはずである(説明可能性)。そして達成され可視化されたものが説明可能である限り、その実践は、それが展開される状況・場面のコンテクストに適合しうる妥当なもの(自然なこと)として、そこに居合わせる成員たちから、同定されるはずである(文脈表示性)。最後に、福祉実践のやり取りが為される〈いま-ここ〉の現実には、そこに居合わせる自分にもクライアントにも第三者にも、説明可能な「人々の方法・手続き」によって文脈表示性に隈なく規定された場面として構成(達成)される一方、そうした「人々の方法・手続き」は、その現実の「場面の求める“ところに”において”成立する」(54)ものである以上、その状況・場面は、そうした「人々の方法・手続き」による達成に規定され、それらの手続きと方法を、ともに映し出しているはずである(相互反映性)。もし、そうでなければ、その福祉実践は、極めて当たり前であるが故に、そこには何の問題もなく、自明なものとして周囲の人たちから認知され、信憑されることはなくなり、その福祉実践が、例えば犯罪的であるといった様に、問題的な事態、通常では考えられない事態等として、捉え返されるであろう。常識的に振舞う限り、私たちはそこで自らが達成しようとしていることを省察することなくやり過ごしてしまい、これらに対して無自覚のままに済ませている。そして実際に、それで済む。そのことと同様、ソーシャルワークが展開される〈いま-ここ〉における現実それ自体も、このような仕方で、常に既に達成されていくが故に、その達成の過程も「隠蔽」(171)され続け、自己「忘却」(60)され続けていく。その結果、福祉実践において上首尾なものとして「得られる成果は、常に偶然の産物となり、一つの経験の一端へと埋没」(73)してしまう事態を招いてしまう。

通常は経験化されることなく等閑に付され、意識から捨てられるこれらの、一見して些細にもみえる事態が重要な意味を持つのは、ここからソーシャルワークにおける「専門実践」(72)の「無限の」(46)可能性が広がるからである。では、それは如何にしてなのか。

## V. 「気づきのメソッド」が育む知とは？

ソーシャルワークにおける「専門実践」(72)の「無限の」(46)可能性が広がるのは、前述した福祉現場のコンティンジェントな現実を端を発する。そこでは、何が要請され、どのように対応すべきか、その「正答」(161)は用意されておらず、場当たり次第に対応を捻り出すことが問われる困難な状況が、ソーシャルワーカーや実習生の前に横たわる。福祉現場のコンティンジェントな特性は、何らかの課題が要請された際、即興的に動くことが要請される。そこにソーシャルワークの特性とそれ固有の難しさ（そしてこれが同時に魅力にもつながる）がある。こうした状況に対して如何に対応するか。このことが、ここでは問題になる。筆者が指摘するように、「援助者は、日々、偶然的に遭遇する実践的課題へ取り組み、その都度、どうにかこうにか正答を見つけ出す。それは、まさに眼前の課題との実践的な格闘の末に、効果的な手ごたえを引き出す作業」(161)である。

そこで必要となる「正答」らしきものを導き出すのは、単なる専門理論ではなく、「単なる知識でもなく、単なる事象でもなく、その両者のアマルガムに置かれるもの」(59)、即ちそれは福祉現場で「気づき」と称される実践知である。つまり、そこで問われるのは、その「実践の相互反映性」(59)である。ここでいう「実践の相互反映性」とは、ソーシャルワーカーがクライアントに対して、噛み合った援助が実践できているという感覚として、状況の中に横溢しているものであると考えてみよう。支援者がこのような感覚を持つとすれば、二人が居合わせる状況には説明可能性と文脈表示性が（社会構造感として）明晰に現れていることになる。しかし、そこに何か課題や問題がある場合、相互反映性が十全ではないが故に、何らかの違和感、欠如感や喪失感が状況に、そして何よりも支援者自身とクライアント双方の上に現れ、その結果、説明可能性にも文脈表示性にも欠損があることになる。このような事態において、ソーシャルワーカーは、どの様にして相互反映性を繕うこと（達成）ができるのだろうか。ここでの問題の所在は、ソーシャルワーカー側での相互反映性の未達成の感覚にある。それは、おそらく、「どうしよう」という初発の直観から、「まずいな」、「うまくいってないな」という〈今・ここでの〉状況の読みから勘ぐられる経験を端緒に開かれるものであろう。自らの対応が相互反映性を欠如しているという感

覚の、その原因は、ソーシャルワークをしていたはずの自分が対応した状況の中に、「ソーシャルワークになっていない」という感覚を相互反映している事実性が残存しているはずである。気づかずやってしまったことから帰結した現実（事実・事態）を照射するところに、エスノメソドロジカルな観方を踏まえた〈省察の知〉<sup>2</sup>が、一つの「気づき」を結実せしめ、そこからどうしたらよいかという実践知が構成される足場が開かれる。こうした失敗経験がもつ意味を、交わした会話、言葉、目線、しぐさ、沈黙等から、教科書や「専門理論」を持ち出す仕方ではなく、自らが意図せずして達成してしまった現実を自己省察的に読み解き、自らがクライアントを前にした状況の中で、何を為してどうなったか、そして何を為しえなかったのか、ということを実感的に気づく手続き・人々の方法が、より良いソーシャルワークへの芽を陶冶することになる。

## VI. 福祉実践の相対化と質的研究方法

「手強い実践の偶然性と状況性という性質へ対応するために現場が苦心の末にたどりついた知恵の一つ」(161-162)としての「気づき」は、以上のようにして得られるとしたら、クライアントと共に、自らが居合わせる状況に対する視線と、自らが応じ、達成しようとしている営みに関する視線が、その都度の具体的なソーシャルワーカーの「専門実践」を規定していくことになる。「見られているが気づかれていない」実践の達成に「気づく」ため、「事実解明的に見極める方法」(91)として、「手続き論的展開に立った方法」(91)を修得することの含意は、この点にあるのだが、現行の社会福祉学教育は、「手続き論的展開」を些細なものとして自己忘却したまま、専門理論を振りかざす。そして、逆にそうであるからこそ、ソーシャルワーカーは自らが置かれた状況を「事実解明的に」(91)相対化する方法を修得することの重要性が、改めて、浮上する。

社会福祉学では、本書が指摘するように、ナラティブアプローチに代表される社会構築主義的展開やグラウンデッドセオリー、あるいは当事者研究といったものまでにわたり、質的調査法ないし質的研究法に注目が集まっている。本書のエスノメソドロジカルな展開も、そうしたものの一つとして位置づけられる。こうした方法論に注目が集まるのは、まさに体験された現実を経験化させるという経験科学的方法論に倣い、社会

福祉現象を相対化させる方法論的な手立て、即ち「気づき」へのアプローチが、必要になっているからである。評者が、ソーシャルワークにはソシオロジストにしてソーシャルリサーチャーとしての資質の重要性を強調するのも、こうした必要からである<sup>3</sup>。実際問題として、ソーシャルワーカーは、自らが体験した現実を捉えるために、やはり、何らかの質的方法論をパースペクティヴ化させて、自らの実践を相対化させる眼をもたなければ、やってゆけないことを、本書は経験的かつ理論的に明らかにしている。

だが、ソーシャルワークの現場では、これらに関する問題意識はあるものの、それを解決させる方法論は定式化されていない。ここにこそ、今日の社会福祉(学)と社会学との関連性に関わる根本問題がある。それに対し、本書は、その一つの解答を呈示する試みである。確かに、そうした「気づき」への端緒は、社会福祉現場に転がっていたり、それを既に自ら実践していたりするはずである。だが、そうした「気づき」を得ることを難しくしている理由は、先述した様に、単にそれに気づくのが難しいという原理的な問題だけではなく、そうした「気づき」を得る方法論としての質的研究法それ自体が、社会福祉学だけでなく社会学においても、理論的に未整備のままに放置され、方法論的混乱を来している事情があるようにおもわれる<sup>4</sup>。この点では、本書で提起される「エスノメソドロジカル・ソーシャルワーク」は、一步、先んじているといえよう。というのも、ソーシャルワークに、エスノメソドロジストとしての資質が必要になるのは、その実践現場で、自らの福祉実践を状況とのレリヴェンスから「事実解明的に」(91)相対化させることができるからである。この資質が社会福祉(学)に対してもつ含意は深く、その射程は広い。

## VII. 本書が提示する問題群と社会福祉(学)の行く末にあるもの

### VII-1. 社会福祉学教育の理念・プログラム・カリキュラム

話は大きくなるが、今日の福祉現場での問題状況を踏まえ、本書が示す「手続き論的展開」を踏まえた「エスノメソドロジカル・ソーシャルワーク」という発想の転換を実現させるには、現行の福祉学教育のパラダイムのままで行くことは、果たして可能であろうか。

本書では、フィールドノーツを活用した実習前後を含む現場実習指導により、件の限界を乗り越えようと志向するアイデアが示されるが<sup>5</sup>、社会福祉現場ないし社会福祉学の現況を鑑みると、本書の問題関心を共有する読者たちにとって、これから考えなくてはならないのは、本書が指摘するパラダイム転換、即ち現場実習を軸とした社会福祉学の教育プログラム・カリキュラムをどのようにデザインするのか、ということになるだろう。

### VII-2. 〈手続き論的展開〉のパラダイム化に向けて

本書でいう「手続き論的転回」の重要性は十分に確認できるのだが、残念ながら、今日の社会福祉学においては大きな意義はまだなく、T.クーンのいう意味で、まだパラダイム化されてはいない。この方法論をパラダイム化させるべく、現場実習を軸とした社会福祉学の教育プログラムとカリキュラムのデザインの問題とともに、本書で示された「手続き論的転回」をパラダイム転換へともたすためには、学際的な領域を視野に入れ、多様な対話可能性を更に追求していくことが必要になるだろう。そこで、社会学を専攻する評者の見地から、この点に触れてみたい。

筆者は芸者の「座持ち」(50)や「徒弟制」(154)という事例に論及しているが、これらの技術習得のための教育法は、どの業界にもあるだろうし、そしてそのプロセスは、社会化 socialization 現象として括れるものである。その一例として挙げることができるのは、徒弟制における「役割の遂行」(154)であるが、これは、例えば身体論(Iの概念)を射程に収める G.H.Mead の役割取得からも把握可能な事態であると考えられる。ここで評者が指摘したいこととは、本書が狙いを定める対象は、人間行為の意味や経験、知識を問題系とする社会理論をはじめ、人間科学の領域に通低するところがあり、社会学だけでなく、教育学、芸術論、社会史、哲学、経験科学の方法論、文化人類学、心理学など、学際的な関連学説の諸検討を通して、社会福祉学のパラダイム転換をめざすことには、やはり意味があるのではないか、ということである。筆者が本書の中で希求する「エスノメソドロジカルな能力の習得が、スタンダードとなる可能性」(173)を実現させるには、こうした展開が必要になるであろう。

### Ⅶ-3. 手続き論的展開・エスノメソドロジー・シュッツ現象学との関連性

更に、シュッツ現象学に学ぶ評者の見地から、みてみよう。因みに、以下で示される論点は、筆者に当てた問題群というよりは、むしろ筆者から示唆を受けた評者自身にとって考えてみたい問題群である。本書の主要な論点は、「見られているが気づかれていない」ことへの「気づきのメソッド」(92)の構築を試みることにある。本書では、その方法論として、エスノメソドロジーを採用するが、これは本書で主題化された社会福祉現象がもつ問題の構造上の特性に帰せられる面はあるものの、エスノメソドロジーと現象学的思考が輻湊した関連性領域が開かれていると考えられる。既に別のところでも指摘したことだが<sup>6</sup>、エスノメソドロジカルな仕方での「気づき」への道筋は、達成された当該状況に関する〈手続き論的分析〉に始まりつつ、最終的には支援者や実習生の「経験」にまで差し戻される(160)。

この点で、本書において展開されるエスノメソドロジーの道筋は、相互行為を照射しつつも、そこから、それまでの行為や世界経験の主観的意味の探索へと赴くことで(これは、後述するが、筆者が批判する「上空飛行的思考」(84)と対を成す)、状況の中に留まり、そこに内在するものを探る思考の展開であり、相互行為場面に内在する微細な事象を徹底的に相対化させる点でも、極めて現象学的な行為論的展開として読み解くことができる。

少し敷衍しよう。入浴介助(機械浴)における「泡」の事例は、その事例が生じた状況での経験が、「一般的に家に泡、泡のお風呂あるわけでもないし」(57, 157)という「気づき」、つまり状況の内には実在してはいないはずの〈一般家庭の風呂〉における類型的経験との重合により構成されているとみることもできる。即ち、実習生や支援者は白紙の状態現場実習に臨むのではなく、それまでの世界経験、記憶の総体を自己所持しながら望むのであり、当該状況には必ずしも実在的に内在していないものがレリヴァントになることが考えられるとすれば、本書でいわれている「経験」(171)や「知識」のもつ含意は、例えば記憶や「知識ストック」、「経験の集積」といったシュッツ現象学の術語と、どういう関係を取り結ぶことができるのだろうか。状況の内にとどまり、その様相を記述する実践により、「上空飛行的思考」(84)を排除するためには、

「存在論上の恣意的線引」(59)を排し、「徹底した〈同一説〉に基づく」(62)く必要があることは評者も強く同意するが、そうした方法論的要請とは別の次元で、実習体験・経験という主題の内部地平として、状況「外」や境界的なものを考慮することは、できるのではないだろうか。むしろ、こうしたものが、状況に内在すると考えることは、本書の狙いと齟齬を来たすものではないと考えられるが、如何なものであろうか。たとえばパーソンズの「単位行為 unit act」の概念やシュッツの「生活誌的状况 biographic situation」の概念を踏まえるならば、一見して外的にみえるものも、状況の要素として組み込む方途が拓かれ、そのことにより日常生活を基底とする福祉実践像、日常生活と社会福祉との隠されたレリヴァンスのもとに展開される福祉実践像というソーシャルワークの動態的性格を引き出すことができはしないだろうか。

上記のないものねだりにみえる評者の問いかけはともかく、極めて根底的な地平から、極めて射程の広い問題圏を照射する本書が問いかけるものは、社会福祉がもつ本質の問い直しを指し示している。この労作から、多様な議論が巻き起こることを、強く期待したい。

#### 〈注〉

1 ここで筆者により示される「〈いま-ここ〉でのソーシャルワーク実践を、解釈として省みるのではなく、事実として発見することである」という論旨における「解釈」が持つ意味は、現象学的社会理論における「解釈」と同義ではないことには留意されたい。ラフスケッチではあるが現象学的にいうと、解釈とは、社会的現実や世界体験についての志向的配意作用に基づく主観的な意味構成を基礎に、その都度、為される自己理解の集成として反省的に構成されるものである。本書で筆者が持ち出す「解釈」とは、〈いま-ここ〉の状況に内在している場面的な構成要素を「事実として発見すること」ではない。評者が筆者と交わしたメールのなかの、筆者による一文を引くと、「『“解釈”として省みる』とは、その場面に関わらない手立て(教科書=理論・方法等をはじめとする言説等)を用いて、その場面を外部的に説明し尽そうとする姿勢を意図している」。このように、筆者のいう「解釈」とは、状況から物理的に離れて、それを事後的に、状況には内在していなかつ

た理論や概念図式を当該の実習経験に外挿することにより、得られる理解を「解釈」と規定することになる。以上を踏まえると、筆者が指摘する「事実として発見すること」は、現象学でいう「解釈」に相当する位置づけになる（但し、シュッツ現象学における「解釈」は状況を物理的にはなれて状況外のもの外挿する客観的意味連関に基づく客観的理解という理路をも確保してはいる）。これと同様のことは、「省察」という評者が使用する言葉にもあてはまる。この点については、注2を参照願いたい。

- 2 ここでの「〈省察の知〉」は評者の造語であるが、その含意は「その実践が構成する〈内側〉の仕組みを見分ける」（藤田 2015 p171）ことのできる知を指示することにあり、それは、注1で示したように、状況から物理的に離れて、状況には内在していなかった理論や概念図式を当該の実習経験に外挿することを含意とする「解釈として省みる」という意味での「省み」を意味するのではない。
- 3 取り分けここでは、筆者の指摘している「存在論上の恣意的線引 ontological gerrymandering」に象徴される問題系が念頭にあるが、この線引き問題は、シュッツのいう一次構成体と二次の構築体（日常知と科学知）とを意図的に混交させることにより、語りにおける人称性を消滅させる構築主義的な方法論にも通じる場所がある。科学的世界には帰属していない調査対象者が、恰も科学の世界にいる研究者の学問的問題関心に即して、語っているかのように、語りをコラージュしていくことは、「研究者の特権」ではないはずである。
- 4 ソーシャルワークには、エスノメソドロジストとしての資質とともに、ソーシャルリサーチャーにしてソシオロジストとしての資質が必要になるもう一つの理由を、評者は次のように考えられている。まさに体験された現実を経験化させる理論的な道筋を巡る方法論の検討においては、何を論拠に、何処なる問題状況から、如何なる方法論が成立したのかを発生論的に捉え、そしてそれにより、何が把握可能であり、何が把握不能であるかを、クリティカルに捉える理論的な視点が必要になる。社会学や社会福祉学の領域に林立する質的研究法に関しても、同様のことが言えるはずである。もし、こうした理論的視点に無理解なままでいると、一つの方法論に、それとはまったく異質な別の方法論を外挿するような

論拠なき折衷が横行しだし、結果的には現実の把握に失敗し続けるであろう。

一般的な立論ではあるが、「社会福祉調査は社会調査を応用したもの」であるとか、「社会福祉調査に固有の方法論は確立していない」と指摘されてきた中、2000年以降には社会福祉調査関連の書籍が多数刊行された。だが、依然として、不可解なのは、次の点である。社会踏査 social survey の歴史を振り返ればすぐに理解できることだが、社会調査は、貧困研究や家計調査という広義の社会福祉調査から始まっている実状がある。これらが今日でいう、社会福祉調査の原型であり、そして社会学調査 social studies も、これらを欠いては今日の姿にはならなかったはずである。社会調査は、社会踏査を含む社会福祉調査を基盤とするこうした成立事情が実状と考えられるのだが、いつの間にか、社会調査の起源としての社会福祉調査は忘却されてしまい、今日においても、この点を等閑に付したままで済まされているきらいがある。ここには、社会福祉学と社会学、あるいは社会福祉調査と社会調査の関係史を転倒させてしまったミッシングリンクがあるはずである。それが何なのか、まだ突き止められてはいない点が不可解である。実践指向が強い学問領域ほど、理論的なトレースが必要になることは、本書が示している通りである。

質的研究法は、体験された現実を経験化させることにより、自らの福祉実践を、状況とのレリヴェンスから捉えることにより、相対化させることができる方法論的ツールとして福祉現場で使えるということだけではなく、それらが社会福祉の、福祉現場の臨床場面と両立可能な学問的方法論の構築を指し示し、これからの社会福祉を創造していく可能性を秘めていると考えれば、尚更、質的調査を支える理論的視点は重要な位置を占めるといえよう。

- 5 但し、ここからは本書第5章で資料として示された「ノーツ」（128-142）のフォームに、実習生が如何にして記述するのかを巡る「〈書き〉のエスノメソドロジー」という更なる課題が開かれると考えられる。
- 6 藤田徹（研究代表者）2015「質的分析方法による『社会福祉研究』および『実習指導』に関する研究—岩手県立大学社会福祉学部と山口県立大学社会福祉学部の教育研究に関する特色を踏まえた共同研究として—」、平成24年度岩手県立大学社会福祉学部研究プロジェクト研究成果報告書